

氏名	徳本文
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第412号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	古代語複合動詞の研究
審査委員	(主査) 沖森 卓也 小嶋 菜温子 山本 真吾 (白百合女子大学文学部教授)

I 論文の内容の要旨

論文名……古代語複合動詞の研究

(1) 論文の構成

序章 研究の目的と方法

- 一 研究の目的
- 二 研究の対象と方法

第一章 複合動詞の定義と問題点

第一節 複合動詞の定義

- 一 複合語
- 二 複合動詞

第二節 複合動詞の問題点

- 一 一語の認定と複合動詞の成立
- 二 複合動詞後項と補助動詞
- 三 複合動詞前項と接頭辞

第二章 動詞連用形＋動詞型複合動詞の構造と分類

第一節 現代語複合動詞の分類

第二節 古典語複合動詞の分類

- 一 関（一九七七）による分類
- 二 山王丸（一九九四、一九九六）による分類

第三節 筆者による分類

- 一 分類の対象
- 二 分類の項目と基準
- 三 形式化の基準
- 四 分類の実例
- 五 複合動詞の範囲

第三章 古代語複合動詞の概要と変遷

第一節 概要

- 一 分類結果
- 二 上代における複合動詞
- 三 平安時代の複合動詞の傾向と特徴

第二節 前項・後項の間に助詞が入った例について

- 一 分類結果
- 二 『源氏物語』以前の例
- 三 『源氏物語』の例

第三節 前項・後項の順序について

- 一 『万葉集』の例
- 二 『源氏物語』の例

第四節 接頭辞的前項動詞について

- 一 古代語における接頭辞的前項動詞の概要
- 二 前項動詞の形式化～『万葉集』の例を中心に
- 三 平安時代の接頭辞的前項動詞

第五節 転義した語

- 一 古代語で転義の見られる複合動詞
- 二 各語の用例と意味

第四章 修飾関係の複合動詞

第一節 概要

- 一 前項が後項を修飾・限定するもの
- 二 後項が前項に意味を付加するもの

第二節 前項と後項の目的語の不一致について

- 一 上代における目的語の不一致の例
- 二 平安時代の資料における例
- 三 複合動詞の成立と修飾関係の複合動詞

第三節 前項を否定する後項について

- 一 ～残る・～残す
- 二 言ひ消つ・言ひ隠す
- 三 書き落とす・書き漏らす
- 四 見捨つ・見放つ

第四節 修飾関係の後項動詞「いづ」

- 一 「いづ」の辞書記述と先行研究
- 二 自動詞として使われた後項動詞「いづ」
- 三 他動詞的に使われた後項動詞「いづ」

第五章 補助動詞的用法の後項動詞

第一節 古代語における補助動詞的用法の後項動詞の概要

第二節 可能（不可能）・困難

- 一 辞書記述
- 二 前項動詞
- 三 意味・用法と変遷
- 四 「あまる」

第三節 程度・強調

- 一 前項動詞の内容のはなはだしさ
- 二 前項動詞の動作の対象・範囲に関するもの
- 三 程度の変化を表すもの

第四節 動作の方向・対象

第五節 意図・心情・態度

第六節 補助動詞の後項動詞「あふ」「かはす」と接頭辞的前項動詞「あふ(あひ)」について

- 一 古代語における後項動詞「あふ」の形式化と意味

- 二 後項動詞「かはす」について
- 三 前項動詞「あふ」の意味と変遷
- 第七節 「いる（四段）」「いづ」について
 - 一 「いる（四段）」について
 - 二 補助動詞的用法の「いづ」について
- 第六章 後項動詞の補助動詞的用法～アスペクトに関わる補助動詞の後項動詞
 - 第一節 アスペクトに関わる補助動詞的用法の後項動詞の概要
 - 一 概要
 - 二 開始
 - 三 継続
 - 四 反復
 - 五 中止・中断
 - 六 終了・完了
 - 七 効力・影響の残存
 - 第二節 「～そむ」「～はじむ」
 - 一 「～そむ」「～はじむ」の意味～辞書記述と先行論文から
 - 二 古代語「～そむ」「～はじむ」の概要
 - 三 上代の「～そむ」「～はじむ」
 - 四 平安時代の「～そむ」「～はじむ」
 - 五 まとめ
 - 第三節 「～みる」「～をり」
 - 一 「～みる」「～をり」の辞書記述と先行研究
 - 二 後項動詞「～みる」「～をり」の変遷
 - 三 上代（万葉・記紀）の「～みる」「～をり」
 - 四 『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』と三代集における「～みる」「～をり」
 - 五 『源氏物語』の「～みる」「～をり」
 - 六 敬語動詞
 - 七 まとめ
 - 第四節 「～わたる」「～つづく（下二段）」
 - 一 先行研究
 - 二 動詞「わたる」「つづく（下二段）」の意味と複合動詞「～わたる」「～つづく（下二段）」の分類
 - 三 『源氏物語』における「～わたる」と「～つづく（下二）」
 - 四 『源氏物語』以外の資料における「～わたる」「～つづく（下二）」
 - 五 まとめ
 - 第五節 「おく」について
 - 一 現代語「～ておく」の意味
 - 二 古代語の動詞「おく」の意味と分類
 - 三 本動詞の意味を保持している後項動詞「おく」
 - 四 補助動詞的用法の後項動詞「おく」

五 まとめ
終章 まとめと今後の課題

テキストと参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は古代語の「動詞連用形＋動詞」からなる複合動詞の語構成と意味について考察したものである。上代から平安時代に成立した、『万葉集』『記紀歌謡』『続日本紀宣命』『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『源氏物語』を中心とする和文資料から用例をすべて抜き出してデータベース化し、それに基づいて考察を行ったものである。

第一章では、先行研究で示された複合語と複合動詞の定義と語構成をまとめ、複合動詞の定義の揺れ、前項動詞と接頭辞、後項動詞と補助動詞の位置づけ等の問題点を指摘する。

第二章では、先行研究における複合動詞の各種分類について検討し、それを踏まえて、実質的意味と形式化、前項・後項の意味関係などに基づく独自の分類基準を設定し検証する。

第三章では、収集したデータの集計を示し、上代から平安時代にかけての複合動詞の概要を数量的データと用例を中心にまとめる。どの資料においても修飾関係の複合動詞が多くを占めること、上代から接頭辞の前項動詞、補助動詞の後項動詞の存在が確認でき、時代を下るとともに増加すること、転義した語、つまり前項と後項が一体となって新たな概念を表す例も徐々に増加することなどを明らかにする。

第四章では、多くを占める修飾関係の複合動詞について論じる。前項・後項の関係では、①前項が後項の原因・理由、手段・方法を表すもの＝後項が前項の結果であるもの ②前項が後項の様態や状況を表すもの ③前項が後項の思考・発言の具体的内容であるもの ④後項が前項に対して、様態、動作の方向を付加するものがあること、前項と後項の目的語が一致しない例の存在を挙げ、前項と後項が単なる二つの動詞の羅列ではないことを述べる。さらに、これら修飾関係の複合動詞、接頭辞の前項、補助動詞の後項、転義した語は現代語複合動詞と同じ形態と意味関係によるものであり、古代語における「動詞連用形＋動詞」の多くは、未成熟ではあっても「複合動詞」と呼ぶことができると結論づける。

第五章では、補助動詞的用法の後項動詞の概要を示し、次いで「可能（不可能）」「程度・強調」「動作の方向」「意図・心情」を表す後項動詞について個別に記述する。また、特に検討すべき点の多い後項動詞である「あふ」と「かはす」、「いる」と「いづ」については、それぞれ節を設けて考察する。この補助動詞的用法の中で特に大きな位置を占めるのが、アスペクトに関わる後項動詞であることを指摘する。

第六章では、アスペクトに関わる補助動詞の後項動詞の形式化と意味について論じる。アスペクトに関わる後項動詞を、「開始」「継続」「反復」「中止・中断」「終了・完了」「効力・影響の残存」の意味に大別し、それぞれの意味の後項動詞の形式化の過程をたどる。また、類似の意味の後項動詞「そむ」と「はじむ」、「ある」と「をり」、「わたる」と「つづく」について、それぞれの意味と相違点について検討を行う。さらに、後項動詞「おく」について、主に意図性の観点から検討し、古代語「～おく」の基本的意味は動作の効力・影響の残存であるとする。そして、これら補助動詞の後項動詞は時代が下るとともに増加し、複雑な事象の描写に欠かせないとし、その背景として、時間の流れや事物の具体的描写を必要とする「物語」の発展が関わると述べる。

II 論文審査の結果の要旨

本論文は、11世紀初めまでの古代日本語を対象として、動詞の連用形に動詞が下接する形式の複合動詞の構成ならびに意味について考察した研究である。複合動詞のなかでも、前項動詞と後項動詞の関係について分析した考察はこれまでも多くの先行研究があるが、本論文は資料に直接に基づいた実証的な分析、および精緻な分類において際だっており、今後の古代語複合動詞の研究において踏まえるべき基礎文献となる、高い水準に達した好論である。さまざまな点で新たな知見が得られたことなど、その研究の価値と意義は大きく、次に記すように質の高いものであると評価できる。

第一に、調査対象としたテキストをつぶさに読み込み、そこに使用されている複合動詞の用例について一語一語文脈に即してその意味を詳細に解明し、その意味を正確に把握した上で、用法別に分類するという実証的なものであるという点である。複合動詞一つ一つを形式的にはなく、その実質において、文脈の流れを重視して読み解くという点で、実証性がさらに高まっていることの意義は大きい。具体的に言えば、調査対象としたテキストには「動詞連用形+動詞連用形」は単純に合計すると延べ2万、異なり語で7000を超えるという調査を踏まえた精緻な分析に基づくものである。

第二に、複合動詞の語構成においては修飾関係が最も多いことが確実に記述できた点である。従来修飾関係は少ないと言われてきたが、近年修飾関係は少なくないという考察も提示されている。このため、このテーマについての研究には少なからぬ混乱が見られたが、本研究が実証的に裏付けたことで、修飾関係が最も多いという見方が今後は定説となろう。また、その混乱の要因が語構成の分類における「修飾関係」という定義付けにあることを明快に指摘できた点も研究史上、貴重なものと言える。

第三に、文脈を確実に把握した上での考察であることによるものであるが、いわば各論として取り上げる後項動詞についての考察一つ一つが重みを持つ点である。たとえば、「いづ」が「さしいづ」など目的語を持つ後項動詞として用いられる場合、他動詞として扱うべきであるとするなど、個々の例を踏まえて適切に論述しえた点は大きな成果である。写本が比較的善本である作品を調査対象とし、計量的な面でも通時的に複合動詞の諸相を捉えることに成功しており、それゆえ、語構成の分類、後項動詞の意味用法などについての分析および記述に強い説得力がうかがわれることも特筆に値する。

ただ、調査対象にした資料が和文体に限定されており、平安時代における漢文訓読体には全く触れられていないのは惜しまれる。このような今後の課題として残されている点もあるものの、本論文は、古代日本語の和文における複合動詞について、文脈に即して適切にその用法を逐一考察し分類した研究として高い価値をもつものと認められる。また、前項動詞および後項動詞の意味の形式化について詳細な検討を加えて精密に整理しており、これまでにない注目すべき指摘も随所に見られる。本論文における指摘のそれぞれは今後研究史にすべて取り込まれていく高い水準の質をもち、この分野の研究の更なる発展を期待させるものでもある。

以上の理由から、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。